

栽培と培養でのヒガンバナの増殖

ヒガンバナは、奈良県の景観植物として重要であるにもかかわらず、昨今減少しています。効率的な増殖技術が確立されれば、遺伝資源の保存や耕作放棄地の有効利用に役立つことが期待されます。そこでヒガンバナの球根生産を行うにあたって、球根の肥大特性と *in vitro* での増殖における培養条件を検討したので報告します。

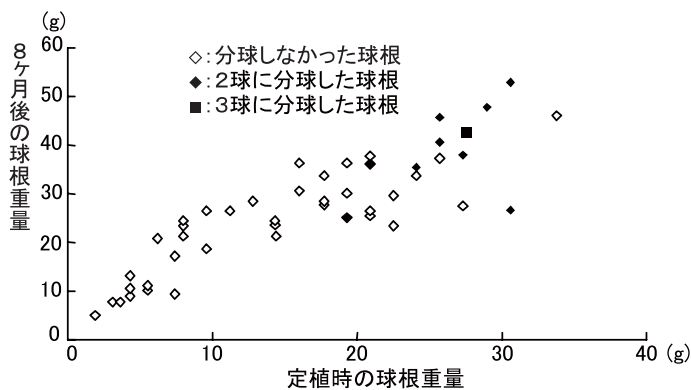
まず、定植時の球根重量が球根の肥大に及ぼす影響を調べるため、2007年10月1日に培養土（ピートモス：パーミキュライト：パーライト＝2：2：1）を入れた5寸鉢へ47球定植し、2008年6月7日に球根を掘り上げ球根重量を測定しました。なお、元肥として緩効性固形肥料を培養土1ℓあたりに2g施肥しました。

その結果、定植時の球根重量の平均は16.3gで、8カ月後の球根重量の平均は26.8gであり、約1.6倍に増加しました。また、定植時の球根重量が25g以上の場合、70%の球根が2球以上に分球しました（第1図、第2図）。

また、ヒガンバナ球根のりん片切片から再分化個体を獲得するため、培地の検討を行いました。2,4-D 0.1 mg/ℓ と TDZ 0.1 mg/ℓ、0.5 mg/ℓ、1.0 mg/ℓ を組み合わせた3つの培地で不定芽が形成され、特に、2,4-D 0.1 mg/ℓ と TDZ 1.0 mg/ℓ を添加したMS培地での不定芽形成率は11.1%と最も高くなりました（第3図）。

これらの研究結果は、最適な球根を生産する上で基礎となるデータになると考えられます。

（資源開発チーム 浅尾浩史）



第1図 冬季8カ月間の栽培によるヒガンバナ球根重量の増加



第2図 ヒガンバナ球根の分球



第3図 ヒガンバナ球根りん片からの再分化

